

令和3年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
(知的障害に対する通級による指導についての実践研究)
成果報告書(概要)

受託団体名
国立大学法人宮城教育大学

1. 研究のテーマ

知的障害に対する通級による指導についての実践研究

2. 研究の名称

令和3年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
(知的障害に対する通級による指導についての実践研究)

3. 研究代表者

氏名	所属	役職
高田 淑子	宮城教育大学/宮城教育大学附属特別支援学校	教授/校長
西城 潔	宮城教育大学/宮城教育大学附属小学校	教授/校長

4. 事業の実績

(1) 研究の目的

研究の目的
知的障害特別支援学級ではなく通常の学級内に在籍する知的障害の可能性のある児童を通常の学級担任と連携して早期発見し、それぞれの学年の発達段階に応じた課題に対する支援方法を検討・提案・実践的検討をする。具体的には、宮城教育大学附属小学校にて学年に応じて変化し、必要となる支援方法を通級による指導の観点と在籍する通常の学級の観点の両面から提案する。また、通級による指導の直接的な支援だけでなく、在籍する通常の学級での合理的配慮をはじめとした必要な支援及び担任、通級指導教室担当者、特別支援教育コーディネーター等の担当者間の効果的な連携方法についても本研究では検討・提案することを目的とする。

(2) 取組内容

1 宮城教育大学附属小学校内通級指導教室(愛称:さぽーとルーム)での取組
(1) 事例1
1) 在籍学級における対象児の様子
対象児は、通常の学級に在籍する小学1年の男子児童である。対象児の実態を把握するためにKABC-II(個別知能検査)を実施した。その上で、対象児の認知特性に合った長所活用型指導を実施した。通級による指導は、週1から2時間の頻度で実施した。対象児の通級指導教室での指導内容は、学級の様子と家庭での様子等から担任、保護者、通級指導教室担当者で検討し、以下の内容について自立活動

として取り組んだ。

・困ったときに相手にどのように伝えるのかといったソーシャルスキル（自立活動）

自立活動では、困ったことがあったときにどのように伝えるのかを話し合って伝え方を確認し、実際にロールプレイを通して取り組む活動を行った。

なお、自立活動とは別の時間を設けて数概念の理解を促す個別指導を実施した。具体的には、数概念の理解を深めるためにブロック、色そろばん、カード等を活用し、5及び10の合成・分解の理解を促す指導を行った。

（2）事例2

1）在籍学級における対象児の様子

対象児は、通常の学級に在籍する小学4年の児童である。対象児の実態を把握するためにKABC-IIを実施した。その上で、対象児の認知特性に合った長所活用型指導を実施した。通級による指導は、週1から3時間の頻度で実施した。対象児の通級指導教室での指導内容は、自立活動の「4. 環境の把握（5）認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること」、「5. 身体の動き（5）作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること」、「6. コミュニケーション（5）状況に応じたコミュニケーションに関すること」を中心に実施した。

具体的には、空間認知を高めるためのビジョントレーニングを取り入れた指導を実施した。また、現在、困っていることや過去に困ったことなどを通級指導教室担当者と話し合い、対象児に合った改善策を一緒に考える取組を実施した。

（3）事業の実施日程

実施時期	実施内容
令和3年9月	<p>【校内委員会による通級指導対象児決定】 校内委員会にて自校の通級指導教室に通う対象児を決定</p> <p>【自校の通級指導教室にて通級による指導開始】 個別の指導計画に記載された長期目標及び短期目標を達成させるため自立活動を中心に個別指導を附属小学校内の通級指導教室（さぽーとルーム）で実施した。通級による指導は、対象児と通級指導教室担当者の一対一で実施した。</p> <p>【個別検査の実施】 対象児の実態把握のために必要な個別検査（KABC-II）を実施した。</p> <p>【個別の教育支援計画，個別の指導計画，自立活動の個別の指導計画の作成】 保護者との教育相談時に個別の教育支援計画及び個別の指導計画作成について承諾を得た。</p>
令和3年10月	<p>【研究成果発表による情報収集】 令和3年度日本教育大学協会研究集会（オンライン）の第3分科会「大学・学部と附属学校園の連携・協働」にて研究発表を行い本事業の取組の一部を発表した。</p>

令和3年12月	<p>【令和3年度第2回附属学校運営委員会特別支援部会の開催】</p> <p>第2回附属学校運営委員会特別支援部会にて知的障害の可能性のある児童の通級による指導の成果と課題を報告した。</p> <p>【保護者との教育相談】</p> <p>保護者との教育相談を担当，通級指導教室担当で実施し，これまでの取組の成果と今後の課題を個別の指導計画を基に報告した。教室での配慮や今後の指導内容についての情報共有を実施した。</p>
令和4年1月	<p>【大学教員による定期巡回相談実施】</p> <p>大学の学部及び教職大学院の教員による定期巡回相談を実施し，本研究事業対象児に対する助言を得た。</p>
令和4年2月	<p>【令和3年度第3回附属学校運営委員会特別支援部会の開催】</p> <p>1年次の知的障害の可能性のある児童の通級による指導の成果と課題を報告した。</p> <p>【学会にて研究成果発表】</p> <p>日本LD学会第5回研究集会（オンライン）に参加した。</p> <p>【保護者との教育相談の実施】</p> <p>本事業の対象児の保護者と教育相談を実施し，令和3年度の通級による指導の成果と課題について報告した。また，令和4年度の通級による指導の取組について保護者に説明し，承諾を得た。</p>
令和4年3月	<p>【事業成果報告書（1年次）作成完了】</p> <p>事業成果報告書（1年次）を作成した。</p>

（4）成果

小学1年の対象児は，指導後において困った状況のときには，自分から手をあげて担任や支援員を呼ぶ姿がしばしば見られた。以前は，黙って悩む姿が多く見られ，悩んでいる様子に気付いた担任や支援員が「どうしたの。」と声をかけることが多くあったが，現在はそのような姿があまり見られなくなり，自分から担任や支援員を呼び，質問して悩んでいることを解決しようとする主体的な姿が見られるようになってきた。

教科の補充指導では，教材・教具である色そろばんを本事例では活用して，指導に当たった。その結果，しだいに数をまとまりで捉えることができるようになってきた。今後，更に継続した指導を行うことで，数のまとまりを意識した計算や数概念の捉えが具体物や半具体物がなくても念頭操作でできるように指導をしていく予定である。

小学4年の対象児は，通級による指導の自立活動の時間で学校や学級で，現在困っていることやこれまでに困ったことを通級指導教室担当者と話し合いながら列挙した。その上で，その困ったことについての今後の対策や対応を一緒に話し合った。その結果，対象児が困っていた，宿題，ノート，縦割り活動時の困り感，テスト，言われたことを忘れてしまう，何日かわからなくなってしまうについては，改善策を考えることができ，困り感の軽減あるいは改善を図ることができた。しかしながら，困っていることのいくつかについては，令和3年度の指導期間内では，指導時間の関係で，対象児と解決策を話し合うことまで至らなかった。

(5) 課題と対応方策

自立活動と教科の補充の時間数のバランスを学年及び個人の特性や学校・学級適応の状況に応じて、事例は少ないものの分析する必要があると考える。学年が上がるにつれて教科の学習内容が難しくなり、これまでの教科の補充を行うだけでは授業についていくことがしだいに困難になることが予想される。そのような中で、自立活動は大きな役割を果たすものと考えられる。対象児が通級指導教室担当者と自分が困っていることを一つ一つ確認し、自分に合った方法を共に考え、実践し、自己肯定感を維持する必要があると考える。

また、これまでは対象児が低学年と中学年のみであった。高学年を対象にした研究をまだ実施できていない状況である。次年度である令和4年度は、小学5年生になる対象児を継続して通級による指導を実施し、高学年で必要な自立活動及び教科の補充、そしてその両方のバランス等を検討していくことを考えている。

本事業を更に充実させるために令和4年度は対応方策として以下の点を取り組んでいく。

- ・宮城教育大学の大学教員による定期巡回相談、通級による指導の参観及びケース会での助言
- ・宮城教育大学附属特別支援学校の特別支援教育コーディネーター及び関係者による通級による指導の参観及び対象児が在籍する対象児の学校生活の様子の参観
- ・関係者による進捗状況の報告と確認

大学及び附属学校間の連携を更に強化し、本事業を推進していく。